



コスモスのある風景～大府市明成町付近～

共和病院 家族会 ～家族会について～

当院には「さつき会」という家族会があります。その歴史は長く、昭和42年5月から運営を始め、今年で34年を迎えました。

「こころの病」の治療は病院のスタッフだけではなく、ご家族の協力も必要です。病気についての正しい理解、患者様との接し方、外出や外泊時に気を付けることなどをはじめ、保険・年金・福祉制度などについての学習、そしてさまざまな地域精神保健福祉活動についての情報交換等を約3か月に一度行っています。そのほかに年一回夏のピクニックとしてのぶどう狩り、家族会全国大会への参加、ブロック地区研修会への参加等を企画しています。

長期入院に伴う扶養する側のご家族の高齢化による家族機能の低下により、これからは精神障害者を地域で支えるハード面とソフト面を構築していかなければなりません。「地域で精神障害者を支えるシステムづくり」という大きな課題の中で、家族にすべてを任せるのではなく、地域の中で安定した生活が送れるようにするためにはどのようにしたら良いのかということ、医療機関も保健・福祉の行政も一緒に考えて行く必要があります。

地域医療を推進する当院として、それらの機関と連携をとりながら、家族の支援、地域家族会の育成も含めて今後も家族会活動を続けて参りたいと考えています。



地域連携と家族会

精神保健福祉法の平成11年改正により、精神障害者の保健福祉の重要な施策として、平成14年度から居宅生活支援事業や福祉サービスの利用に関する相談援助業務が市町村において行われることになり、これからは身近な機関でサービスが受けられるようになってきます。

そのような中で地域社会資源の重要な位置を占める地域家族会・地域作業所もますますその活動が目目されます。それは地域家族会・地域作業所が地域で生活する人たちに多く利用されている現状があるからです。

病院家族会としても今まで以上に地域との連携をとり、地域の情報や社会資源の情報をご家族に提供することを心がけています。これからはボランティアの人たちやホームヘルパーの



人たちの力を借りながらケアマネジメントをする機会も増えてきます。

病院家族会の存続がご家族の方に少しでもお役に立てるよう、これからも家族会を続けていきたいと決意を新たにす次第です。またこの広報誌をご覧になっていただいたことをご縁に、住み良い地域社会を目指してともに考えてみようではありませんか。

社会福祉医療部 医療福祉室

家族会に参加して

家族会には15年ほど前から参加する

ようになりましたが、母親に任せっきりでして、定年を期に7年ほど前からは私もかかわるようになりました。2年前から家族会会長をつとめています。名誉院長先生をはじめ共和病院には長年にわたり大変お世話になっております。

私の息子は十代で病気になり、入院を幾度もくり返してきました。病気になって一番つらいのは息子自身だと今では思うのですが、病気になった頃は、「そんなばかなことはない」「どうしてこうなったのか」「なぜできないのか」という親のいらだちから叱りつけるばかりで分かってやれませんでした。

だんだんと『病気』についてわかるようになったのは、15年ほど前にさつき会に入ったことと、それと同じ時期に地域の家族会に入ったのがきっかけだったように思います。さつき会や家族会では自分と同じように悩んでいる人がいることを知りました。家族同士の方が相談しやすいこともあり、話し合っているうちに苦勞をわかちあえるような気がして心強さを感じました。また



病気の知識も次第に増えていきました。病気に対する偏見があるなかで患者さんが頼りにしているのは病院の先生であり、また家族だと思えます。患者を抱える家族にはたくさんの苦勞がありますが、家族会が少しでも役に立てばと思います。

家族会は患者への対応や病気や障害について勉強したり、また家族同士話し合うことで支持・助け合いができる場です。これからも多くの方に家族会に参加して頂けますようお願い申し上げます。

家族会会長 生田

初期消火競技会



去る9月5日に大府市横根グランドにて、第13回初期消火競技会が行われました。この競技会は消火、救護、搬送を正確により早く行うことを個人と団体で競う競技会です。私たち共和病院は、個人の部6名、団体の部では一組の参加をしました。そして、競技会二日前より猛練習を行い、競技会当日を向かえました。結果は何と女子の部2位と5位入賞、また男子の部では3位と5位入賞とすばらしい成績を収めることができました。特に女子の部のナース道脇さん、入賞のナース高原さんは団体の部との掛け持ちで、体力と競技には頭が下がる思いです。また、男子の部PTの加藤さん、OTの朝倉さんは、地元で消防団員ということもあり期待通りの活躍だったと思います。

さて、競技会を通して有事の際は、迅速な初期消火を行い且つ、患者様を安全に避難誘導を行うためにもより多くの職員が同競技会に参加して頂きたいと思えます。ちなみに私の参加した団体の部というと、練習より上手くいったと思うのですが・・・来年こそはリベンジだぞ！

野口 昭



子育てノウハウ

～ 誉めることの大切さ～

夏休みも過ぎ、いつの間にか季節も秋になり幼稚園や小学校へ入った子ども達が外の社会との関わりで成長したり、時には不安定になったりしています。多くの子どもは新しいことに出会ったとき、嬉しいとき、辛いときなど、家に帰り母親にその報告をします。何も言わない子どもは心の中に何らかの不安を感じているか、または「言っただけいけない・言っても仕方がない」などと思っている可能性もあります。

B子さんは、父、母、妹の四人家族の長女として生まれました。三歳下に妹が生まれたのを機に、いつのまにか「良いお姉さんでないといけない」と思うようになり、母の手伝いをし、自分のことは自分でする手のかからない子どもでした。小学校に入り勉強も喜んでし、いつも良い成績をとっていました。しかし母親から誉められたことが無かったので「もっとがんばらなくては」と思いB子さんのほうから母親に甘えたり不満を述べたりしませんでした。小学校三年頃より、夜になると何か寂しい不幸せな気持ちが沸き、これを解消するため、ひとつの遊びを始めました。それは自分が物語の主人公になり「王子様が現れ、とても幸せに暮らしたのです」などと最後にハッピーエンドになるものでした。そのため寝る前の時間にいつも「独り言」を言っていました。B子さんは誰でもそうしていると思っていましたが、中学校の修学旅行の時に同室の友達が誰も「独り言」を言っていないのに気づき「自分がおかしいのかな?」と思いました。高校で寮生活をするようになり「独り言」を言えず、また同室の先輩が母親に甘えている様子や母親との電話のやりとを聞き、自分と母との関係は冷たいもので、「誉められたことがないのは母親が愛してくれていない」と感じ、眠れなくなり登校できなくなったのです。このような母子関係が長く続くと子どもは「自分はダメな子」評価し、自己の価値の引き下げがおこり、友人との関係にも自信が持てず無意欲で頑張りのかかない状態に陥ります。後にB子さんの母親の面接では「愛情が無かった訳ではなく、しっかり者で隙のないB子に対して誉めるとか、お手伝いに対して労うとかができなかった」「むしろ信頼していたからこそ、家から離れたのです」と述べています。B子は「良い子でいなければ」と思いこみ母親に何も言わないでいたのですが、その結果、母親との関わり少なくなり自分自身を理解したり正しく評価する物差しが持てなくなったのです。親は良い子だからと安心せず言葉をかけてやり、良いときは誉め、いけない事は叱る。という「枠」を持つことが必要なのです。 院長 榎本 和

編集後記



「町のはずれに明かりがともる頃、
君の古里を夕闇がつつむ」

23年前、私が創った唄の冒頭です。季節はもう秋。この3番目の季節がやってくると必ず口ずさんでしまいます。

夏の疲れを感じて、人はふと休息を取りますが、そんな時「こんな風景だったら落ち着くな」といつも思います。少し休んで又がんばる為に秋はとても良い季節です。みなさんはどんな秋の風景を思い浮かべますか？
さあ、心のシャッターを自由にきってください。

結核緊急事態宣言



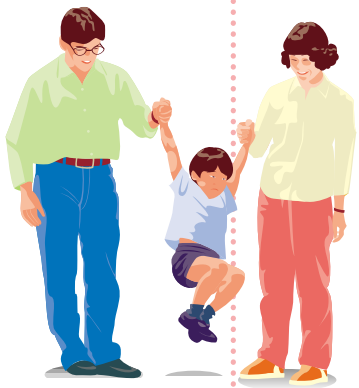
かつては「国民病」と言われていた結核が再び力をもち始めようとしています。減少し続け

てきた発生患者数が平成9年には38年ぶりに増加に転じ、厚生労働省は平成11年7月に「結核緊急事態宣言」をだしました。日本国内で年間4万人以上の患者が発症し、3千人近くの方が亡くなるという昨今、決して過去の病気とは言えなくなってきています。

このような事態になった原因・背景として、過去に自然感染をしている70歳以上の高齢世代の方々が免疫力の低下により、眠っていた結核菌が再燃すること、その一方で結核未感染のいわゆる“免疫無き世代”

の若年齢層の方々が罹患者と接触することで発症する、といったケースが増えています。

結核の初期症状は、軽い咳・痰、37台の微熱といった、いわゆる「風邪」とそっくりの症状です。咳が2週間以上続いたり、また、微熱が長く続くようであれば、風邪だと思込まないで医療機関を受診するようにしましょう。



結核の診断は胸部単純X線撮影(レントゲン検査)、ツベルクリン反応等を参考として、喀痰検査による「結核菌」の検出で確定診断をします。

早期診断がなされれば、現在では治療法も確立されており、ほとんどの場合で完全に治癒することが可能です。守りさえし

っかり固めれば結核も決して怖い病気ではなく、過度の心配や恐れをもつことはないのです。



共和会理念・基本方針

『優しい医療・楽しい職場』

私たちが目指す『優しい医療』とは！
患者様に安心と満足を提供する医療
良質且つ効率的な医療の提供
患者様へのサービスの充実

私たちが目指す『楽しい職場』とは！
毎日の出勤が楽しくなる職場
職員のレベルアップと仕事の充実が
感じられる職場
職員の満足が患者様へ反映される職場

当院をご利用の皆様へ

わたくしたちは、利用者の皆さまへより良い医療をやさしく安全に提供し、納得のいく医療を受けていただくために努力しています。それには利用者の皆さまと医療者の意志の疎通が最も重要であると考えます。

これを実現するために、わたしたちは思いやりのある、人格を尊重した医療を提供するとともに、以下のような医療を目指しています。

- 1.あなたは、個人的な背景の違いや病気の性質などにかかわらず、必要な医療を受けることができます。
- 2.あなたは、医療の内容、その危険性および回復の可能性についてあなたが理解できる言葉で説明を受け、それを十分納得して同意したのちに、医療を受けることができます。ただし、必要に応じて主治医の判断によってご家族、代理の方にお話をする場合もあります。
- 3.あなたは、今受けている治療、処置、検査、看護・介護、食事その他についてご自分の希望を申し出ることができます。また、他の医療機関に転院したい場合は、必要な情報を提供致します。
- 4.あなたの医療上の個人情報は保護されます。

病院長 榎本 和



医療法人 共和会 **共和病院**

愛知県大府市梶田町2-123

TEL.0562-46-2222(代)

URL <http://www.kyowa.or.jp/>

引かれて行く牛はまさか屠殺場へとは思ってもいいで肥えたお尻の肉をゆすって歩いて行く。やがて殺されるとき知らずに行く牛を哀れと思ふは牛の尻までかなしい秋風やとつたい出し、牛の尻と止めたところに「トモア」があり皮肉があつて漱石の最良の句のつたとおもいます。

もつと面白いことは、この句は明治四十五年の秋に作ったといつこと。漱石は四十四年から痔病で入院二回手術を二回して四十五年十月二日に全快して退院しています。おそらくその頃に作った句でしょう。

昭和十九年十一月に痔瘻の手術を経験した私も患部のガーゼ交換の痛さは大へんなもので、漱石も第一回の手術の後の四十四年九月二十五日松根東洋城に出した手紙に「肛門の方は段々よけれど創口未だ肉を上げず、ガーゼの詰替すこぶる痛み候」と書いています。この漱石の肛門と牛の尻とを重複して今度この句をよみなおしてみてください。又何か別の想いがあるかもしれません。

俳句とは実に楽しいものです。

俳句ヨロイ

名譽院長
加藤 邦之助

秋風や 屠られにいく 牛の尻 漱石